

Title	ウマイヤ朝後期における政治的変遷の特殊性について
Sub Title	Some aspects of the political history of the later Umayyads
Author	黒田, 寿郎(Kuroda, Toshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.2/3 (1967. 11) ,p.309(471)- 329(491)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本信廣先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0313">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0313</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ウマイヤ朝後期における

## 政治的変遷の特殊性について

黒田寿郎

### 一、ウマイヤ朝後期の位置

ウマイヤ朝後期、つまり同朝七代カリフ、スライマーンの即位（回教暦九十六年、西暦七百十五年）から同朝の没落（回教暦三百二十二年、西暦七百五十年）に至る期間は、アラブ世界、もしくはイスラーム世界の分極化<sup>(1)</sup>の時代ということができるだろう。ムハンマドの出現によって、初めて成就されたイスラームによるアラブ統一は、その余勢をかつて中東の地を中心に巨大な帝国を作りあげた。そしてこの帝国の統一は、多少の躊躇はあつたにせよ、少くともウマイヤ朝前期までは十分に保たれていたのである。もちろんムハンマドの死の直後にこの統一を脅かした激しい背教<sup>リッダ</sup>の動き、三代目正統カリフ、ウスマーンの殺害、正統四代カリフ、アリーとウマイヤ朝創始者ムアーウィヤとの抗争等々といった否定的な事件はあつた。しかしカリフを中心とするイスラーム帝国の統一は、この時まで搖ぎなく確保されてきたのである。だがウマイヤ朝後期にいたるや、この統一は徐々に破綻をきたすことになるのだ。

こうした破綻の種子は、元来ウマイヤ朝の建設そのもののうちにあつた。シッフィーンの戦い以後の、ムアーウィヤの巧妙な政策も、その本質上、帝国内の人心を掌握しきるていのものではなかつたのだ。特にアリーを擁護したイラークの

民の反感は根強く存在しつづけ、ついにはウマイヤ朝没落の最も重要な原因の一つとなるのである。<sup>(2)</sup> 「ウマイヤ家の者がカリフの地位につく何等の理由もなく、家系がクライシユ族の裔であること以外には、彼等とカリフ職の間には何の関係もないのだ」というアル・マクリージーの言葉は、当時の不満分子の意見を端的に表しているのであろう。「ムアーウィヤは最後のイスラーム改宗者で、彼の父（アブー・スフヤーン）は「反ムハンマド派の」領袖であり、ムアーウィヤはカリフの地位につくさいに、協議<sup>シユーラ</sup>の制度さえも無視しているのだ」という非難の声は、最も痛烈にウマイヤ朝の急所をついているのである。

ムアーウィヤの経歴はさることながら、協議<sup>シユーラ</sup>の制度の無視は、多くの人々の反感をかきたてるに十分だつた。例えばイラークにおいては、ムアーウィヤをカリフとして認めた者の数は極く僅かであつた。しかも彼等をムアーウィヤ承諾に導く論拠は、純粹に宗教法的なものだつたのである。現世の事柄はたゞ一人のイマームに委ねられねばならない。「イマームこそは、宗教社会の基礎を作る根本のものであり、これあつて初めて人々の福祉が確保され、すべての事柄が確立されるのである。」<sup>(5)</sup> このような宗教法的観点からムアーウィヤに忠誠の誓いを行なつた者も、次第に彼の政治的偏向に眼覚めざるをえないことになるのだ。アフマド・アミーンのいうように、ウマイヤ朝の政治は、そもそもの初めから「アラブの政治ではなく、ウマイヤ家の政治」<sup>(6)</sup>といつた色彩が濃かつたのである。ムアーウィヤが協議<sup>シユーラ</sup>の制度を無視し、武力を用いてカリフの地位をかちとつたことが、まずこの最たる例としてあげられるであろう。<sup>(7)</sup>

アフマド・アミーンのいうように、協議<sup>シユーラ</sup>の制度に関するては、残念ながらその方法、人選、決定事項の規制力等々について明白な規定がない。<sup>(8)</sup>とはいえるこの制度は、クルアーン「協議の章」第三十六節 (*wa 'amruhum shūrā bainahum*.. 何ごともよく協議し合い...) 等に明らかに規定されているのであり、正統四代カリフまで一応遵守されてきたものなのである。もちろん先に述べたように厳密な規定こそなかつたが、それまで人々は不文律としてこの協議を重要視してきた。

しかしこの規定もムアーウィヤ以降完全に無視されてしまうのである。イスラーム帝国内において、<sup>協議の</sup><sub>シユーラー</sub>制度は、もちろん十分なものとはいえないにせよ、民意のいわゆる民主的反映を実現しうる重要な制度であつた。<sup>(9)</sup>これが無視され、事实上廃止された場合の人々の反感は容易に推察しうるであろう。ここでは、宗教法にのつとつてムアーウィヤをカリフとして認めたものが、宗教法にのつとつて彼を非難せざるをえない事態が生じていたのである。それまでの格調高い、宗教的政治はかげをひそめ、カリフ職は一段と現世的なものへと引き下げられてしまつたのだ。事実ムアーウィヤは、意味深長な言葉を吐いているのである。曰く「私は最初の王である」<sup>(10)</sup>、と。

神權政治から権力政治への推移のもう一つの特長は、これも<sup>協議の</sup><sub>シユーラー</sub>無視の上に成り立つ、カリフ世襲制の問題であろう。<sup>(11)</sup>イスラーム帝国破綻の一原因として、ウマイヤ朝の<sup>協議の</sup><sub>シユーラー</sub>無視をあげうるならば、それと同程度の重要性をもつものとして、われわれはこの世襲制をあげうるのだ。ムアーウィヤが実子ヤジードにカリフ職を譲渡する旨公表したとき、人々はウマイヤ朝の世俗的、王権的性格をまざまざと見せつけられてしまつたのである。<sup>(12)</sup>これにたいする不満は、直言、皮肉等々のかたちで多くの史書に記録されているのだ。<sup>(13)</sup> H・I・ハッサンはいつている。「ムアーウィヤが実子ヤジードを後任に任命したとき、世襲制が姿を現わし、イスラーム帝国の政治体制は、正統四代カリフ時代のそれからウマイヤ朝特有のそれへと、つまり<sup>協議の</sup><sub>シユーラー</sub>制度、宗教に依存する体制から、世襲制により、政治優先、宗教は二の次というそれに変つたのである」<sup>(14)</sup>。

政治が世俗化するにつれて、本来宗教的な国家であるイスラーム帝国は、数多くの宗教的分派による内訌、つまりウマイヤ朝にたいする反対派の執拗な叛乱という悲劇に、当然見まわることとなつた。しかし支配王朝の権力が十分強力な場合、こうした危機回避はまだ可能だつた。例えばイラークの大守アル・ハッジャージュ・ブン・ユースフに代表されるようウマイヤ朝後期における政治的変遷の特殊性について

うな、強力な権勢が王朝のもとにある場合、一応表面上の統制を保つことができた。しかしこうした強硬策の中に、この王朝がその後に辿る経過がすでに明確に定められていたのである。人々はアルリハッジャージュを「悪徳、専断、殺戮、暴虐、虚偽の徒」<sup>(15)</sup>と悪しきまにいいながら、彼にたいする、ひいてはウマイヤ朝カリフにたいする敵意を、ひそかに燃やしつづけていたのだ。何故ならば、「イラークの民のよからぬ噂が聞こえる。彼等の許に赴き、奴等を葬つてしまえ」、と命を下しているのは、他ならぬカリフのアブドゥル・マリクだから。

政治の世俗化は容易に意見の対立を産み、激しい対立はイスラーム世界の分極化に一層の拍車をかけることとなつた。だが、われわれはこの分極化の一番の原因となつたもの、つまりウマイヤ朝退勢のきつかけを作り、彼等の首を締めつけたものが、彼等自ら選んだカリフ職世襲制にあることに留意すべきだろう。世襲制とはいいうものの、アラブ世界における婚姻関係の複雑さは周知の如くである。それ故この制度は、時代が下るにつれ、カリフ職獲得をめぐつてウマイヤ朝の者同志の間に強い敵意、憎悪を植えつけ、そうした反感が例えば將軍、宰相達にも及んで結局この王朝を滅してしまうことになるのだ。<sup>(17)</sup>要するに政治の一要素の世俗化は他の世俗化を産み、ついにはイスラーム世界を分極化し、その統一を決定的に乱すという悪果を齎すことになるのである。後期ウマイヤ朝の歴史において、われわれはこの分極作用がある時は緩慢に、ある時は急激に進行するさまを明確に看取することができるのだ。

ウマイヤ朝が潰えさつたのちも、アッバース朝がイスラーム世界の統一を実現することができた。だがその最盛期においても、後者はスペイン・ウマイヤ朝を傘下に入れることができなかつたし、とりわけその政治的体質がウマイヤ朝のそれとは決定的に異つてしまつたのである。P・K・ヒッティはいみじくもいつている。「アッバース朝は、アラブが構成諸民族の一つでしかないネオ・ムスリムの帝国であつた」(傍点筆者)一たび強力な分極作用に見舞われた帝国が、完全に旧来の如く回復するなどということは、所詮願うべくもないことなのだ。

- (一) J. Wellhausen, "Arab Kingdom and its Fall" tr.  
by M. G. Weir, p. 261.
- (二) A. H. al-Kharbūṭālī, "Ta'rikh-l-tirāq fī zill-l-hukm-l-'umawī" 『歷』。
- (三) Al-Maqrīzī, "An-nizātū wa-t-takhādūm bani 'Umayyah wa bani Hāshim" p. 13.
- (四) Ibn Qutaibah, "Al-imāmah wa-s-siyāsah" vol. 1, p. 132~3.
- (五) Al-Māwardī, "Al-'aḥkām-s-sultāniyyah" p. 3.
- (六) 'Ahmad 'Amin, "Fajr-l-islām" p. 254.
- (七) Abu-l-Fidā, "Al-mukhtaṣar" vol. 1, p. 186.
- (八) 'Ahmad 'Amin, op. cit. p. 240.
- (九) M. Y. Müsā, "Nīzām-l-hukm fī-l-islām" pp. 113~121.
- (十) Al-Ya'qūbī, "At-ta'rikh" vol. 2, p. 232.
- (十一) 薩伊卜 E. Tyan, "Le Califat" vol. 1 『歷』。
- (十二) Al-Jāḥiẓ, "Risālah fī Mu'tawiyah wa-l-'Umawiyin" p. 16.
- (十三) Ibn Qutaibah, op. cit. vol. 1, p. 189.
- (十四) H. I. Hassan, "Ta'rikh-l-islām" vol. 1, p. 437.
- (十五) Al-Jahshiyārī, "Kitāb-l-wuzarā' wa-l-kuttāb" p. 42.
- (十六) Ibn Qutaibah, op. cit. vol. 2, p. 31.
- (十七) H. I. Hassan, op. cit. vol. 1, p. 438.
- (十八) P. K. Hitti, "History of the Arabs" p. 280.

## II 分極化の方針

ウマイヤ朝の用語を借りてわれわれは、ウマイヤ朝を分極化の時代と名付けた。すなはちハムダラブの胸中に巣喰つ古くから部族的な連帶感情にたよりして宗教的な征服を行ない、その結果彼等の間に広汎なイスラーム的統一をめざした。この統一の具体的な成果が、強大なイスラーム帝国の出現に他ならないのである。<sup>(一)</sup>だが予論者以後四代カリフ迄保たれてきた政治の宗教的性格は、ウマイヤ朝に至りて急激に損なわれ、そこには古来の世俗的な部族的連帶感情が頭をもたなくなってしまったのだ。そしてこの連帶感情は、アラブ世界の分極化の最も主要な原因となるのである。

ソシドわれわれは少々おわり道をして、ウマイヤ朝後期に特筆すべきこと、聖戦の成果がそれ以前に比して多く

てあがつていな事実に注目しよう。事実この点に関しては、先代のアル・ワリード一世がなした程の対外的成果を、後のカリフ達は一束になつてもあげえていないのである。もちろん聖戦(ジハーダ)とは本来宗教的なものである。しかし聖戦はまた、政治的現象として経済的側面も持つてゐるのである。ある世俗の民にとつては、これは隣りの部族の財産を狙うよりも遙かに利益のあることだつたのである。聖戦(ジハーダ)に関するヴェルハウゼンの、辛辣だが、示唆的な意見は、ウマイヤ朝後期に逆の意味で通用するのである。「内証を補修する最良の方法は、対外的発展にあるように思われた。何故ならばこれは、内部の人心の乱れを癒やす直接的な方法だつたのだから。反抗的な諸部族は、聖戦(ジハーダ)を通じてイスラームの関心事へと引き寄せられ、それと和解したのだつた。<sup>(3)</sup>」ところで飽和状態に達した対外的発展が固い壁にぶつかり、強力なビザンティンとの戦いが一進一退をたどるようになると、これと丁度逆の作用が生じるのである。とにかく対外事情がこのような状態になるとき、為政者たるもののは十分対内事情を整備すべきであつた。しかし生憎なことにイスラーム帝国の内部事情は、悪化の一方を辿つていくのだ。

輝やかしい外征の記録を残したワリード一世の後をついだ、ウマイヤ朝後期初めてのカリフ、スライマーンがまず最初に行なつたことは、インド遠征の指揮官であるアル・ハッジャージュの従兄弟ムハンマド、あるいはアル・ハッジャージュの信奉者であり、中央アジアの征服者であるクタイバを罷免することだつた。そしてウマイヤ朝黄金時代の立役者の一人であるクタイバは、スライマーンの即位を嘉としなかつたという廉で、悲劇的な死をとげることになるのだ。<sup>(4)</sup>

カイス族（ムダル）の権勢がアル・ハッジャージュにおいて極まつた、ということは周知の事実である。ところですでにアル・ハッジャージュは他界していたにせよ、その一統、一味の者に反対をうけたスライマーンとしては、彼等の力を即刻弱める必要があつた。カイス族に敵対するにあたつて彼は、カイスの宿敵であるヤマン族のヤジード・ブヌル・ムハッラブといつた人物を登庸し、ホラーサーンの大守という重要な地位に任じてゐるのである。スライマーンはこのような

拳に出ることによつて、自ら部族闘争の騒乱の中に自分を投じてしまつたのだつた。スライマーン以前の時代には、カリフたる者は、いわば専断者として政事を率領し、臣下の者のいさかいによつて彼の政治が左右されることはなかつた。例えばアブドゥル・マリクの時代には、かの専横で名の知れたアル・ハッジャージュですら、宿敵ヤジードを投獄することができなかつたのである。ちなみにヤジードが投獄されたのは、アブドゥル・マリクの死後なのだ。<sup>(7)</sup>

カリフたる者が、部族的抗争の中に身を投じなければ安身立命がないかない。これがこの時代の実態であつた。ところで具体的な史実にあたる前にわれわれは、この時代の政治的変遷に影響を与えた、重要な諸要素を抽出してみることにしよう。カリフを頂上にいただきながらも、その下では果してどのような政治的底流が渦巻いていたのだろうか。

ジユルジー・ザイダーンは、時代は遡るが正統四代カリフ、アリーの時代の社会構造を分析して、以下のような系統化を行なつてゐる。<sup>(8)</sup>

(一) ムダル、ヤマンに代表されるような血族的集団。

(二) イラーク、シリア、エジプト等々の地域的集団。

(三) 正統派、シーア派、アル・ムウタジラ派等々の宗派的集団。

ところでわれわれはこのような集団の区分けを、丁度ウマイヤ朝後期にも適応させることができるだろう。例えばアリーの時代には、バスラはウスマーン派に、クーファはアリー派に、シリアはウマイヤ派、ジャジーラはハーリジュ派、ヒジャーズは正統派に所属していたと考えられるのだ。そしてウマイヤ朝は一旦これを権力によつて統轄したものの、たえずこれらの集団の相互対立に悩まされなければならなかつた。イスラーム世界の分極化は、右にあげたような一連の集団の集団感情の発露<sup>(9)</sup>に従つて着々と度を深めていくのである。

ウマイヤ朝は、一応ムダル、ヤマンの両血族的集団を二つながら自分の支配下におくことができた。しかしどう

ンの例を見てもわかるとおり、ムダル（アルリハッジャージュ派）、ヤマン（ヤジード派）の対立を清算することはできず、むしろ次第にこれに攪乱されるような結果となつてしまつたのである。

さらにまたシリアを根城とするウマイヤ朝は、エジプトを手なづけえたものの、イラークとは根強い対立をつづけ、さらにはホラーサーン、北アフリカ地域を完全に敵にまわしてしまうことになるのだ。イラーク対シリアの対立を解消しえなかつたことが、地域的分極化に著しく拍車をかけているという事実は否めないこと<sup>(10)</sup>なのだ。

カリフの神聖度の減少は、多くの宗教的分派の抵抗をさまざまなかたちで妥当化した。シア派、ハーリジュ派のたえざる反抗は、殉教者の数が増すにつれウマイヤ朝の權威、為政にたいする憎悪を人々の間に植えつけていつたであろうことは、想像にかたくないのである。

以上の諸要件に加えてわれわれは、非征服地の民である被護民<sup>(マワーリ)</sup>の抬頭という事件を重要視せねばなるまい。被護民<sup>(マワーリ)</sup>とアラブとの関係は、その本質上あい対立するものであつたが、これもまた四代カリフの時代まで、つまり善政がしかれていた間はさして険惡なものではなかつた。<sup>(11)</sup>しかしウマイヤ朝、特にアルリハッジャージュのイラーク大守時代になると、彼の強硬弾圧政策にたいする反撥から、イラーク在住のアラブと被護民<sup>(マワーリ)</sup>の為政者にたいする反感はその極に達するのである。そしてこの地域における被護民<sup>(マワーリ)</sup>は多く逃亡したり、中央アジア征服に参加することによつてこの難を遁れていっているのだ。<sup>(12)</sup>それも不可能な者達は弾圧下に、反ウマイヤのアラブと結託して、ひそかに叛乱の機を窺つていたのである。そして彼等は殆んどあらゆる叛乱に参加していたのであり、事実ウマイヤ朝を倒してアッバース朝を興隆させたのは、これら非アラブ人だつたといつても過言ではないのだ。<sup>(14)</sup>アラブと非アラブ被護民<sup>(マワーリ)</sup>との結婚、これがウマイヤ朝の命とりとなり、またアッバース朝の体制を根本的に規制するものとなるのである。

註

- (一) ‘A. M. Mājid, “At-ta’rīkh-s-siyāsī li-d-dawlat-l-‘arabīyah”, vol. 2, p. 341.
- (二) Al-Balādhurī, “Kitāb futūh-l-buldān” vol. 2, p. 128.
- (三) J. Wellhausen, op. cit. p. 23.
- (四) At-Tabarī, “Ta’rīkh-t-Tabarī” 2, 1273. Ibn al-‘Athīr, “Al-kāmil” vol. 4 p. 137. 又 I. A. K. 4 亜細亞書
- (五) At-Tabarī, op. cit. 2, 1268.
- (六) At-Tabarī, op. cit. 2, 1306, Al-Jahshiyārī, “Kitāb-l-wuzara’ wa-l-kuttāb”, p. 49.
- (七) At-Tabarī, op. cit. 2, 1138~1144, 1182, I. A. K. 4 pp. 96, 106.
- (八) J. Zaidān, “Ta’rīkh-t-tamaddun al-islāmī”, vol. 4, p. 77.
- (九) ‘asābiyah’ は誤つて二種々の定義があつたが、類推せん。の體が、最も一般的な広汎な意見で用ひた體を記す。
- Ibn Khaldūn, “Al-muqaddimah” 註釋。
- (十) ‘A. H. Kharbūtārī, op. cit., 参照。
- (十一) M. B. Sharif, “As-sirāt baina-l-mawālī wa-l-‘arab”, p. 24.
- (十二) Ibn Qutaibah, op. cit., pp. 31~2.
- (十三) Ibn Qutaibah, op. cit., vol. 2, pp. 59~60.
- (十四) Ḥamzah al-‘Isfahānī, “Ta’rīkh sīnī mulūk-l-ard wa-l-anbiyā” p. 216.

### III. 分極化の問題

既に述べたとおりの分極化作用は、その要素をもつたあらゆるアラブ・アラビア（回教暦九十六一九年、以後年号も同じ回教暦）の古代以前に由来する。しかしの時代になると、その単純の要素は作用力を強め、あることは他の複数要素との結び合つて、一種の化学変化を起こし、それが阿拉伯王朝の基礎をあらわすものである。

ペライマーンの時代以前にも、すこしアダル・ヤーハの対立は存在した。しかしの対立の渦中に直接身を投じなければならなかつたのは、ウマイヤ朝において彼を驅逐したのである。彼の統治する帝国の奥底には、これがどのくらいあつたよ

うな破壊的要素が不気味にうごめいていた。しかし彼は、何等効果的な政策をうちだす訳でもなく、もっぱら世俗的な快樂の追究にいそしんでいたのである。彼の行状については、ダマスカスの人々の口の端にのせられていたという流行の言葉が、よくその実態を告げてくれるであろう。「アルリワリードは芸術愛好家、ハレムと贅沢好きはスライマーン、ウマルの敬虔さは類もなし。」

スライマーンはまた大食いであつた。<sup>(2)</sup> 彼は丁度没落前のローマ貴族たちのように、政事などはそつちのけに、もっぱら王朝の安泰の基礎までも喰らいかけていたのである。

スライマーンの後を継いだウマル・ブン・アブドール・アジーズ（九十九—百一年）は、殆んどすべての歴史家が認めているように、ウマイヤ朝第一のカリフだつた。<sup>(3)</sup> 家臣の強い慾憲があつたにせよ、スライマーンは死の床で最も優れた人選を行なつたことになるのだ。<sup>(4)</sup> 実際彼は、彼がカリフに任じられなかつたならば、ウマイヤ朝の没落はより時期を早めたのであろうと推測させるほど善政をした。『彼は五代目の正統カリフである』<sup>(5)</sup> という評価を初めとして、その人格的特性にもとづく善政については、もちろんの歴史家が至るところで言及している。

彼はまず、公金着服の廉でスライマーンの寵臣ヤジード・ブヌル・ムハッラブを罷免した。<sup>(6)</sup> さらに後任の大守達を任命するにあたつて、部族的対立などには眼をむけず、たゞ公正なる人物という規準にのつとつた彼の人選は、いわゆる分極化作用を阻止する上で大いに力があつたのである。さらにウマルは、アルリハッジャージュの代から行なわれていた、イスラーム改宗者から人頭税をとりあげるという制度を完全に廃止した。この際の彼の言葉、「アッラーがムハンマドを遣わしたのは、イスラーム布教のためであつて、割礼をほどこすためではない。」<sup>(8)</sup> という彼の言葉には、賢帝の面目躍如たるものがあるのであるのだ。新回教徒からの税金徴収は多くの叛乱の口実となつていたが、この新政令のおかげでウマルの治世に

は、ペルシャ人、トルコ人、<sup>(9)</sup> インド人、<sup>(10)</sup> ベルベル人の間から多くの新改宗者がでているのである。その他彼の行なつた租税面での善政に関しては、アル・ヤマンの地租の廢止、<sup>(12)</sup> ナジユラーンの人頭税の大巾輕減等々、例は枚挙にいとまないのだ。

彼の寛仁大度はたしかに民心を和げた。しかしこゝにいささか問題がない訳でもない。例えばH・I・ハッサンの次のような指摘は、今後徹底的に究明する必要があるだろう。<sup>(14)</sup> 「ウマルは多くの改革を行なつた。しかしこれらはイスラームのために行なわれたのであつて、国庫のために行なわれたのではない。」<sup>(15)</sup> ウマルは、新回教徒から人頭税をとりたてた廉でホラーサーンの大守アル・ジャッラーフを罷免している。<sup>(16)</sup> だが彼のエピソードは、当時の経済状況をいささかなりとも反映していないうだろうか。彼は任地を立ち去る際に次のようにいつている。「ホラーサーンの民よ。私は今着ているこの着物を着、この驃馬に乗つて着任した。そして私がこの地で得たものといえば自分の刀の刀飾りだけなのだ。」事実彼が連れ去つたのは自分の老馬と、一頭の老いぼれ驃馬のみだつたというのである。アル・ジャッラーフのような正直者が、改宗者に人頭税をかけたのは、あるいは国庫のためをおもんばかりしたことではなかつたのだろうか。彼の清貧は、こうしたわれわれの想像をかきたててくれるに十分なのだ。ウマルの時代は、アブドゥル・マリクとアル・ハッジヤージュの時代よりも繁栄していたという史家もある。<sup>(17)</sup> だがウマルが、国家収入の減収をさけるため、アラブやその他の回教徒に公地を売りつけている事実もあるのだ。<sup>(18)</sup> とにかくウマル自身は質朴を重んじ、国庫よりの支出を極端に制限している。<sup>(19)</sup> しかしこのようなことは、とにかく後のカリフ達には不可能なことなのだ。彼の死後、その税制改革がたちどころに反古に附されたことを見ても、ことがそれ程簡単ではなかつたことが想像できるだろう。

彼はアリーを公式に誹謗することを止め、<sup>(20)</sup> ハーリジュ派対策にしても、彼等が流血沙汰を起すまでは処罰しなかつた。<sup>(21)</sup> またあらゆる不正を忌み嫌う彼は、キリスト教徒に対する聖戦<sup>(ジハド)</sup>以外は、すべて戦いを禁じているのである。<sup>(22)</sup> 有徳な彼の為

政は、一般の民衆の心の渴きを癒す一服の清涼剤だつた。しかし彼の改革は、奢侈に馴れ親しんだ王朝一族から当然強い反撥を浴びうる性質のものだつた。事実アブドゥル・マリク一家が主流を占める当時のウマイヤ朝の中で、傍系のウマルの即位を喜ばぬ者がいたことは明らかであり、特にヒシャームはその最たる者だつたのである。<sup>(23)</sup> 「ウマルは何の権利も資格もなくカリフの地位に即いた。彼がカリフに相応しい価値を示したのは即位後のことである。」<sup>(24)</sup> このような言葉がささやかれるほど、彼の個人的勢力は小さかつたのだ。

彼の在位期間は余りにも短かかつた。即位後一年半にして彼は病死することになるが、その死因としては毒殺説もあげられるのである。<sup>(25)</sup> 二年半という期間は、大事をなすには余りにも短い期間である。しかしこの短期間に急速に名声をあげていく非のうちどころない人物は、カリフの地位を狙う世俗の徒にとって、目の上の瘤であつたことは想像に難くない。宗教的徳性にもとづく格調高い政治を行なつて、国内の精神的統一をはかつた名君が、元来同じ連帶感情に属すべき親族から毒殺される。ウマイヤ朝はウマルの時代以後、崩壊の坂道を一気にかけおりることになるのだ。イブン・ハルドゥーンのいうように、一たび王朝が全盛期をすぎ、そこに老衰の種子が蒔かれると、これを克服することは非常に困難なことなのだ。ウマルの内政重視政策にもかかわらず、彼の治政の間にもハーリジュ派シユーザブが叛を起し、<sup>(26)</sup> アッバース朝宣伝の秘密行動が開始されていることをみても、この時代の破滅的状況は十分納得されうるだろう。

容易に想像しうることながら、ウマルの死後事態は悪化の一途を辿つた。彼の後を継いだのはヤジード一世(百一一百五年)であるが、「彼は遊び人で、サッラーマとハッバーべといふ二人の奴隸女の恋の虜となつた。(中略) ヤジードの治世は長くなかつたが、この間何の征服もなく、高く評価さるべき事は何もなかつたのだ。」<sup>(28)</sup> こういつた彼の人柄は、その詩の中にも現れている。「この世厭ましと諷るは戯れよ。所詮この世は快樂のもの。」<sup>(29)</sup>

ヤジード二世が即位後すぐに直面したのは、ヤジード・ブヌリムハッラブの叛乱であつた。このカリフの妻はアルリハッジヤージュの娘であり、こうした関係からヤマン派のヤジードとカリフとの関係は険悪であつた。<sup>(30)</sup> カリフは即位直後ヤジード追究の挙に出るが、これを察したヤジードはすぐにバスラへ赴き<sup>(31)</sup>、その地の民を使嗾して決死の叛乱を企てるのである。<sup>(32)</sup> 叛乱の火の手が余りに大きいことを伝えきいたカリフは、すぐに赦免の書簡を送るが、ことはすでに抜きさしならぬところまで発展していた。「アッラーの書と、予言者の慣行<sup>(スンナ)</sup>の名において、シリアの民との聖戦<sup>(ジハド)</sup>に参加せよ。」<sup>(33)</sup> ヤマン派の策士ヤジードは、聖戦<sup>(ジハド)</sup>という大義を唱えて人々の宗教心を唆かし、イラクの民の反シリア感情をかきたてているのである。叛徒の中には宗教的分派のムルジア派もいたことを勘案すれば、彼は血族、地域、宗教的連帶感情<sup>(アサビーヤ)</sup>のすべてを利用していたことになるのだ。マスマラのような名将がこの乱を早目に鎮圧しなかつたならば、事態は最悪の結果を招きかねなかつたのである。<sup>(35)</sup>

彼は無力で、政治に無関心であり、事をなすがまゝに任せておいた。<sup>(36)</sup> 例えはハーリジュ派のシューザブが、ウマル在世中に叛旗をひるがえしながらも、実際行動を起したのは彼の死後であつたという事実を見ても、容易にヤジードの無策の程が知れるのである。<sup>(37)</sup> 彼の短い治世の間に、事実前述したように、すべての種類の連帶感情<sup>(アサビーヤ)</sup>が彼に敵対し、具体的な行動をとつてしているのだ。幸いにして彼の身辺を脅すまでには至らなかつたが、帝国の分極化は次第にテンポを早めて行くのである。こうした状況の中でヤジードは、恋人ハッバーバの死を悼み、自分もその後を追うことになるのだ。<sup>(38)</sup>

ヒシャーム（百五百二十五年）の治世は先三代に比して長く、またその有能さにかけてはウマイヤ朝カリフ三指の中に入るとされている。<sup>(39)</sup> しかしこの有能なカリフも、崩壊の坂を下る帝国を支えきることはできなかつた。この時期に特長的なことは、辺境の地域がようやく騒然としてきたことであろう。王朝の権力は徐々に辺境から侵されてくるのである。

もちろん中心部でも、いくつかのハーリジュ派の乱があり、失敗に帰したがシーア派のザイド・ブン・アリー・ブヌルリフサインがクーファで乱をおこし、これがきっかけとなつてシーア派は、これ以降大きな叛乱をまきおこすことになるのだ。だがとりわけ悲観的な現象は、王朝内で人々が、互いに他に対する信頼感を極度に失なつてしまつたことにあるだろう。例は数多いが、ヒシャーム自身がまずこうした不信感の虜になつてゐるのだ。聰明だが、強欲で疑い深い<sup>(41)</sup>という彼の評価はそのまま、この時代において聰明なカリフが、どのような処世法をとらねばならなかつたかを示してゐるようである。例えば彼はカイス族のイラーク大守、ウマル・ブン・フバイラが次第に不遜な態度をとるのを見て、後任にヤマン派のハーリド・カスリーを任じ、<sup>(42)</sup>前任者を殺している。<sup>(43)</sup>そしてまたハーリドの名声があがつてくるのを見ると、再びムダル派のユースフ・ブン・ウマルを用いてゐるのだ。ハーリドもお決まりのごとくまず投獄され、その後後述するよう前後と同じ運命を辿ることになるのである。一種族の抬頭を抑えるために、他の種族を用い、その抬頭を抑えるために先の種族を用いるといった政策は、結局到るところに不信を植えつけ、あげくのはてには為政者の息の根をとめてしまうことをヒシャームは知らなかつたのだろうか。<sup>(45)</sup>

例えばホラーサーンでは、ヒシャームの代に何度かの遠征が行なわれてゐるが、それと同時に中央の手の届かぬこの地で、ヒシャームの政策の破綻がすでにあらわれてゐるのだ。ムダルとヤマンはこの地でたがいに激しく対立し、種々の紛争を惹き起してゐるのである。<sup>(46)</sup>そこに改宗者にたいする徵税反対を唱える、ソグドとブハーラの民が乱を起し、アラブがこれにかまけてゐる間に突如として、トルコマーンの武将ハーカーンがこの地を襲うのである。<sup>(47)</sup>そこに引きつづきハーリジュ派のハーリス・ブン・スライジュ<sup>(48)</sup>が叛き、イスラーム始つて以来のこととミニューアがいつてゐるように、このトルコマーン武将とアラブのハーリジュ派首領は、互いに手を結んでホラーサーンを脅やかしてゐるのだ。かくしてホラーサーンは最も統治困難な地となり、次々と大守を更迭しても効果なく、ついにウマイヤ朝打倒のための叛徒の温床となつて

しまうのである。

シンドの地でも、アラブ大守は当地のムスリム王を些細な理由から殺害し<sup>(51)</sup>、イラークに直訴に赴いたその弟をも殺してしまって、その暴挙にて、結局大叛乱を惹き起す破目となり<sup>(52)</sup>、それ以後この地も状勢険悪になつてゐるのだ。

一方アラブは、毎年のようにビザンティン遠征に出かけていたがさしたる戦果もなく、それでも百八年にはカイサーリヤ<sup>(53)</sup>、百十年にはサルマ<sup>(54)</sup>を占領したりして氣勢をあげていたが、百二十二年名将バッタールが斃れるに及んでとみに劣勢となつてきた。またアルメニアの地におけるジャッラーフの敗死<sup>(55)</sup>、後任マスマラの戦死等<sup>(56)</sup>、アラブの將軍が敗北を重ねており、次第に憂色が濃くなつてくるのだ。

だが何にもましてアフリカの事態はより険悪だつた。エジプトではコプト人が約十五年間にわたつて抵抗をつけ、ハンザラ・ブン・サフワーンがようやくこれを平定しているのである<sup>(58)</sup>。だがウマイヤ朝が最も手を焼いたのはイフリーキヤにおけるハーリジュ派ベルベル人の大叛乱であろう。新改宗者にたいする人頭税課税反対に端を発したこの乱は、北アフリカ沿岸地方の民の大々的な支持をえて発展し、ウマイヤ軍は敗北に敗北を重ねた末、ようやく各地の正規軍をこの地に投入して乱を鎮圧することができたのだつた。時のスペイン大守ウクバ・ブヌリルハッジャージュは、フランクに対する大攻勢を準備していたが、この乱の平定に赴いたためにフランク征討の機を失したということは、有名な事実である。

スペインにおいても、ヒシャームは熱心にフランク攻撃を画策したが、アンバサが百七年大遠征を試みた後は、この地のアラブ間に件の内輪もめが起り<sup>(62)</sup>、以後アラブ側は劣勢に立たされるのである。百十三年アブドッラーフは、トゥールとポワチエ間でシャルル・マルテルの軍に敗れ敗死しており<sup>(63)</sup>、その後のウクバの進攻案も先のような事情で沙汰やみになつてゐるのだ。

以上のようにヒシャームの治世は、一見安泰に見えながら、その実イスラーム帝国が外辺から崩れ去つて行く時代だつ

た。この間有能な彼は、まず大過なくカリフの務めを果したが、彼とてもそれ以上のことはなしえていないのである。ファン・フローテンは、ウマイヤ朝のハーリジュ派対策について次のようなことを述べているが、この言葉は他の一般的な側面においてヒシャームの統治にも妥当するのではなかろうか。「ウマイヤ朝人士は、この精神的な反抗を根絶するためには必要な思想的力を頼みにすべきであつた。しかしハーリジュ派の反抗とその新たな要求にたいして、彼等のしたことはたゞ反抗者に鬭争を挑むだけのことだつた。<sup>(64)</sup>」新しい、効果的な方策は何一つ立案、実施を見ないまゝ、事態はますます危機の度を深めていくのである。

ヒシャームの後のワリード二世（百二十五—百二十六年）以降は、内訌の時代である。さまざまな不和が一点めざして、つまりウマイヤ朝崩壊をめざして押し寄せたのがこの時代だといえるだろう。

ワリード二世は、ヒシャームが自分にカリフ職を譲らぬだろうという故ない疑惑を持つており、<sup>(65)</sup> 彼を嫌つてもっぱら酒色に耽つていた。<sup>(66)</sup> そしてヒシャームの死の報を聞くや欣喜雀躍し、ただちに彼の親族、寵臣の許に使を派し、彼等の財産を奪い取つてしているのである。<sup>(67)</sup> かくして彼は身内の者の集団感情を完全に裏切つてしまつたのだ。おまけに彼は、自分の二人の息子をすぐにカリフの候補者として指名しているが、このような愚挙は他の誰もが行なつていなかつたことなのである。

ついで彼はカイス族のユースフの要請に従がつて、前述のヤマン派ハーリドの身柄を金で売り渡し、<sup>(68)</sup> 結局ハーリドは殺されてしまうが、この行動によつてヤマン派の強い憎しみを買つてしまうのだ。また彼は神聖なカアバ聖域に建築家を送り、そこに世俗的な快樂のための施設を建てようとする暴挙をあえてし、<sup>(69)</sup> 結局宗教的な連帶感情をも失つてしまうのだ。そして先代ヒシャームの二人の息子が惨殺されるに及び、ヤジード・ブヌリル・ワリードは、親族、ハーリド家の者、ヤ

マン派の連中の強い支持をうけて叛を起し、ワリード二世を弑して自らカリフの地位につくのである。<sup>(70)</sup>

事情は如何なるものであつたにせよ、親族を殺してカリフの地位に昇つたヤジード三世（百二十六年—同年）が、すでに王朝全土を支配しきれなくなつていたことは想像に難くあるまい。彼はもつばらヤマン派の勢力に頼つていたが、ムダルの面々がこれを黙認しておく訳がなかつた。ヤマン対ムダルの戦いは、ついにカリフをも陥し入れる程深酷になつてきたのだ。

彼の即位の直後に、ワリード二世の報復を唱えてヒムスの民が叛いた。<sup>(71)</sup> それと同時にキンナスリーン、ヨルダン、パレスティーンで叛乱が起き、アッバース朝の勢力も着々と拡がつてゐるのである。<sup>(72)</sup> イラークの状勢も険悪で、有徳有能な大守アブドゥラーフ・ブン・アブドゥル・アジーズが手を焼く許りの状態が続いていた。<sup>(73)</sup> またホラーサーンではムダル——ヤマン対立がさらに激化し、前者のナスル・ブン・サイヤールが一時この地を制覇し、独立の構えを見せていた。<sup>(74)</sup> しかしこの地にはトルコから前出のハーリジュ派が姿を現わし、マルウにはアッバース朝の拠点が確保されているのだ。<sup>(75)</sup> 国内はこのようにして麻の如く乱れ、ついにヤジード最大の強敵、これもまた彼の親族のマルワーン・ブン・ムハンマド・ブン・マルワーンが、ワリード二世の報復を理由に叛旗をひるがえすのだ。<sup>(76)</sup>

彼はマルワーンに大巾の譲歩を行ない、マルワーンと和平するが、その直後に病に斃れ、即位後約半年で他界してしまふのである。<sup>(78)</sup> そして彼の死因については、弟イブラーヒームが毒をもつたという、信すべき説も存在することを忘れてはなるまい。<sup>(79)</sup>

ヤジード三世の死後、弟イブラーヒーム（百二十六年—百二十七年）はダマスカスで即位するが、<sup>(80)</sup> この報を聞くやマル

ウマイヤ朝後期における政治的変遷の特殊性について

ワーンは、すぐに兵を首都に進攻させている。そして即位後僅か数ヶ月でこの新カリフも、親族である軍事のヴェテラン、マルワーンによつて弑されてしまうのだ。<sup>(81)</sup>

度重なる親族殺人の結果、ウマイヤ朝の土台は完全に崩れ去つてしまつた。軍事的才能あり、困難にも良く耐えうるというので驢馬<sup>(ビマール)</sup>と揮名されたマルワーン二世（百二十七年—百三十二年）にとつても、事態は余りに悪化しすぎていた。百二十七年マルワーン即位のその年には、所もあろうクーファで、アッバース朝カリフを名のるアブドッラーフ・ブン・ムアーウィヤが叛いているのだ。<sup>(83)</sup>一方ヒムス、ゴータ、パレスティーンあるいはキンナスリーン<sup>(84)</sup>でも叛が起き、前述のハーリジュ派アルハーリスはマルウを占拠していた。またスペインではムダル——ヤマンの対立が極度に悪化<sup>(85)</sup>し、ホラーサーンでは同じ部族対立の虚をついて百二十九年、アブー・ムスリムが初めてアッバース朝の黒旗を公然となびかせ、その後直ちにマルウを占領しているのだ。<sup>(86)</sup>

マルワーンの前には、今や宗教的、地域的、血縁的、あるいは人種的の如何を問わず、あらゆる敵が存在した。そしてこれらの敵は、平定し了せるには余りにも数多く強力だつた。マルワーンがハツラーンでハーリジュ派征討を行なつてゐる間に、彼の頼みの綱だつたホラーサーン大守ナスルはこの地を追われて病死<sup>(87)</sup>し、この間にアッバース側はカフタバがライ、イスパハーンを陥してイラクまで侵入しているのだ。<sup>(88)</sup>不幸にしてカフタバは戦死したが、アッバース側は首尾よくクーファを陥し入れて了つたのである。

クーファ占領後アブドッラーハーリスはすぐに地下から姿を現わし、彼に忠誠の誓いがなされて、ついにアッバース朝が誕生することになるのだ。<sup>(89)</sup>

一方ザーブでは、十二万の大軍を擁するマルワーンが、僅か三万五千の兵に大敗を喫しているのである。多年にわたる

ウマイヤ朝カリフ達の失政から、彼にたゞやく連邦感情は完全に失はれてしまふ。  
こだくなつておられたのです。

ウマイヤ朝最後のカリフ、マルワーハは敵に殺され、敵の手に力尽かされ、上級官吏、ハーブラも殺死し、かへるの年に  
即位した11年を終焉をむすびます。

### 結

- (一) W. Muir, "The Caliphate: Its Rise, Decline and Fall" p. 376.
- (2) Al-Mas'ūdī, "Murūj-dh-dhahab" vol. 3, pp. 184~5.
- (3) Ibn at-Tabātabā, "Al-fakhrī" p. 128.
- (4) Al-Mas'ūdī, op. cit., vol. 3, p. 193, Ibn at-Tabātabā, op. cit., p. 129.
- (5) I. A. K. 4 p. 152.
- (6) As-Suyūtī, "Ta'rīkh-l-khulafā" p. 227.
- (7) At-Tabarī, op. cit., 2, 1350~2, I. A. K. 4 p. 157.
- (8) J. Wellhausen, op. cit. p. 269.
- (9) At-Tabarī, op. cit., 2, 1354.
- (10) I. A. K. 4, p. 157.
- (11) A. M. Majid, op. cit., vol. 2, p. 265.
- (12) Al-Balādhuri, op. cit., vol. 1, p. 273.
- (13) Al-Balādhuri, op. cit., vol. 1, p. 80.
- (14) J. Wellhausen, op. cit., vol. 3, p. 45~46.
- (15) H. I. Hassān, op. cit., vol. 1, p. 328.
- (16) At-Tabarī, op. cit., 2, 1353~5, I. A. K. 4 pp. 157~7.
- (17) J. Wellhausen, op. cit., p. 306.
- (18) J. Wellhausen, op. cit., p. 281.
- (19) Ibn 'Abd-l-Hakam, "Sirah 'Umar bn 'Abd-l-'Azīz" pp. 45~46.
- (20) I. A. K. 4 p. 154.
- (21) I. A. K. 4 p. 155.
- (22) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 302.
- (23) I. A. K. 4 p. 153.
- (24) Al-Mas'ūdī, op. cit., vol. 3, p. 205.
- (25) J. Wellhausen, op. cit., vol. 3, p. 311, I. A. K. 4 pp. 156~7.
- (26) At-Tabarī, op. cit., 2, 1347~9, I. A. K. 4 pp. 155~7.
- (27) At-Tabarī, op. cit., 2, 1358, I. A. K. 4 p. 159

- (28) Ibn Ṭabāṭabā, op. cit., p. 131.
- (29) Al-Mas'ūdī, op. cit., vol. 3, p. 207.
- (30) I. A. K. 4 p. 161.
- (31) Aṭ-Ṭabarī, op. cit., 2, 1359, I. A. K. 4 pp. 160~1.
- (32) Aṭ-Ṭabarī, op. cit., 2, 1379, I. A. K. 4 p. 167.  
~8.
- (33) I. A. K. 4 pp. 171~7.
- (34) Aṭ-Ṭabarī, op. cit., 2, 1400.
- (35) I. A. K. 4 pp. 169~70.
- (36) J. Wellhausen, op. cit., p. 323.
- (37) I. A. K. 4 pp. 155~7, 166, M.J.D. Surūr, "Al-ḥayāt-s-siyāsiyah fi-d-daulat-l-ṣarabiyyat-l-islāmiyah" p. 125.
- (38) I. A. K. 4 p. 192.
- (39) Al-Maṣūdī, op. cit., vol. 3, p. 223.
- (40) I. A. K. 4 pp. 231~3.
- (41) Ibn Ṭabāṭabā, op. cit. p. 132.
- (42) I. A. K. 4 p. 192.
- (43) W. Muir, op. cit., p. 395.
- (44) I. A. K. 4 pp. 235~8.
- (45) I. A. Al-Adawī, "Al-'Umawiyyūn wa-l-Bizantiyyūn"  
p. 306.
- (46) I. A. K. 4 pp. 193~4.
- (47) I. A. K. 4 pp. 202~3.
- (48) I. A. K. 4 pp. 204~5.
- (49) I. A. K. 4 pp. 218~9. G. Van Vloten, "La Domination Arabe, le Shi'isme et les Croyances Messianiques sous le Khalifat des Omayyades" tr. into Arabic by H. I. Hassan and M. Z. Ibrāhīm pp. 60
- (50) W. Muir, op. cit., pp. 403~4.
- (51) W. Muir, op. cit., p. 405.
- (52) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 317.
- (53) I. A. K. 4 p. 199.
- (54) I. A. K. 4 p. 205.
- (55) I. A. K. 4 pp. 248~9.
- (56) I. A. K. 4 p. 207.
- (57) W. Muir, op. cit., p. 406.
- (58) A. M. Mājīd, op. cit., vol. 2, p. 288.
- (59) I. A. K. 4 pp. 222~4.
- (60) J. Wellhausen, op. cit., p. 343.
- (61) I. A. K. 4 p. 197.
- (62) A. M. Mājīd, op. cit., vol. 2 p. 307.
- (63) I. A. K. 4 pp. 214~5.
- (64) G. Van Vloten, op. cit., p. 75.
- (65) Ibn Ṭabāṭabā p. 134.
- (66) Al-Mas'ūdī, op. cit., vol. 3, p. 225.
- (67) I. A. K. 4 p. 258

- (68) I. A. K. 4 pp. 262~3.
- (69) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 333.
- (70) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, pp. 333~4.
- (71) I. A. K. 4 p. 270.
- (72) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 335.
- (73) I. A. K. 4 p. 274.
- (74) I. A. K. 4 pp. 274~6.
- (75) I. A. K. 4 pp. 276~7.
- (76) I. A. K. 4 p. 277.
- (77) I. A. K. 4 p. 278.
- (78) I. A. K. 4 p. 278.
- (79) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 336.
- (80) I. A. K. 4 p. 278.
- (81) I. A. K. 4 p. 283.
- (82) As-Suyūtī, op. cit., p. 254.
- (83) I. A. K. 4 pp. 284~5.
- (84) I. A. K. 4 p. 286.
- (85) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 338.
- (86) I. A. K. 4 pp. 290~1.
- (87) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, pp. 341~2.
- (88) I. A. K. 4 pp. 309~10.
- (89) I. A. K. 4 p. 317.
- (90) I. A. K. 4 p. 320.
- (91) Al-Ya'qūbī, op. cit., vol. 2, p. 345.
- (92) I. A. K. 4 pp. 327~9.
- (93) I. A. K. 4 pp. 330~3.

### 〈付録〉

紙数の関係上本稿では、特にウマイヤ朝後期の政治的推移の軸路のみを踏み出すのみに止めた。階級構造上の変化、その文化的反映等々の問題を廻して、この時代の政治的変遷の法則性を追究しきつむことが筆者の真意であるが、以後はのべる機会に譲りた。